

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：31604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770039

研究課題名(和文) 障害者の芸術表現における美学と身体観の系譜に関する研究

研究課題名(英文) The Study of Aesthetics and Bodies in Disability Arts

## 研究代表者

田中 みわ子 (TANAKA, Miwako)

東日本国際大学・福祉環境学部・准教授

研究者番号：10581093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、障害者アートの実践において提示されている「美学」の系譜をたどりながら、障害者の芸術表現がどのように形成され、そこにどのような身体観の変遷がみられるのかについて考察したものである。その成果は、「アール・ディフェランシエ」と呼ばれた芸術実践の潮流の実態を、ベルギーの知的障害者による芸術団体クレアムでの実地調査(2015年9月)を踏まえて明らかにしたところにある。その内容を研究会(2015年11月)およびシンポジウム(2016年3月)において発表した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to examine the genealogy of "aesthetics" in the disability arts and its effects on artistic expressions and perspectives of the disabled body. Researching on the CREAM which is an artistic organisation in Belgium(September 2015), this study shows the development and the current situation of the "art differencie". The results are presented at a Liberal Arts workshop organised by a NPO (November 2015) and a symposium (March 2016).

研究分野：障害学

キーワード：障害 身体 障害者アート 即興的身体

## 1. 研究開始当初の背景

障害を社会、文化の視点からとらえる障害学において、現在、「障害者アート」が学術的にも実践的にも重要視されている。その背景には、障害者アートがもたらす2つの「美学」がある。まず、これまで否定的に意味づけられてきた障害者の表現を積極的なものとして捉えていくという点において、「当事者の美意識」という意味での「美学」がある。そして、障害者アートが、障害の表象イメージや文化的価値観の形成にきわめて重要な役割を果たしていると考えられることから「文化的表象における美」への効果が期待されている。

このような障害学の視点に基づく当事者の美意識と文化的表象を主題とする研究は、主に英米を中心になされており、その成果が文学および芸術学など人文学の領域において蓄積されてきている。日本においても、障害者アートや文化的表象に関する研究や実践の重要性が増してきており、障害学の視点に基づいた障害者アート研究をさらに充実させていく必要がある。

このように障害のある当事者自身が主体的に生み出してきた芸術表現における「美学」を、既存の文化的価値観に対する「異議申し立て」や「新たな価値観の創出」と捉える障害学の学術的傾向がある一方で、障害者の芸術表現への注目には、「アール・ブリュット(生の芸術)/アウトサイダー・アート」をはじめとして、「アート・セラピー」「コミュニティ・アート」などいくつかの潮流があり、芸術、医療、福祉などの分野から研究され、実践されてきた背景もある。日本国内においては、障害者の芸術表現が、障害者の自己表現を促し、潜在能力を高める(エンパワメント)ことから、文化政策的観点からの関心も高まっている状況である。また、美術市場からの芸術的評価/社会的地位を得ることによる新たな就労の機会や経済的自立を確立していくことに向けた動向もある。

こうした学術的・社会的背景を踏まえ、本研究は、芸術表現のミクロな創造現場に着目し、障害者の芸術表現における「美学」が、障害学や障害当事者の運動の文脈のみならず、より広範な社会的、文化的、政治的文脈のせめぎ合いの中から生成されていることを示すことを目指すものである。

研究代表者は、これまで、障害者アートの実践のありようを調査し、障害者の芸術表現や実践がもつ文化的表象への効果や「美学」の成立過程を検証してきた。若手(B)研究「障害者の芸術表現における「美学」の成立過程に関する研究 障害学の視点から」(平成24年度~25年度)では、障害者アートの実践において提示されている「美学」が、どのように障害当事者自身の美意識から生まれているのかを、アメリカの障害者アートの実践から明らかにすることを課題とした。この研究の結果、障害者の芸術表現において形

成される美学が、従来の障害の文化的表象や身体イメージを変容させるものとして立ち現われつつあり、そのような美学を創出・形成する場として、1970年代以降のアメリカにおける障害学および障害者アートの実践が重要な役割を果たしていることが明らかとなった。

この成果を踏まえ、本研究は、1970年代以降のアメリカの障害者アートの潮流とほぼ同時期に、ベルギーを中心に展開していた障害者アートの潮流に焦点を当てることによって、これまでの研究を発展させるものである。

障害者アートの実践の場で生み出される芸術表現は、障害のある身体に対する否定的な意味づけを積極的なものとして変容させていくという点において、従来の「美」のありようのみならず、「身体観」にも働きかけ、それを攪乱し、変容させるものである。これまでの研究では、障害のある人々の芸術表現にのみ着目して研究を行ってきたが、そのプロセスには障害のある当事者のみならず、彼らを取り巻く人々(指導者、生活支援者、鑑賞者など)の存在が不可欠であるとの見解に至った。そこで本研究では、知的障害のあるアーティストと、アニメトゥールと呼ばれる芸術実践の指導者との関係性に焦点を絞ることにより、芸術表現における「美学」が、どのようにアーティストとアニメトゥールとの「共犯的」な関係性から生まれているのか、そしてそれはどのような身体観に基づき、それを変容させるものなのかを具体的に追究することを課題とした。

## 2. 研究の目的

本研究は、障害者アートの実践において提示されている「美学」の系譜を辿りながら、障害者の芸術表現がどのように形成され、そこにどのような身体観の変遷がみられるのかについて、実証的かつ理論的に調査分析を行うことを目的とした。

本研究では、障害者の芸術表現の中でも、ベルギーのワロン地方リエージュにある、知的障害者による芸術団体クレアム(Créahm)の実践に着目する。革新的な芸術を生み出してきたとされるクレアムの実践例を題材とすることにより、これまで主に美術史、病跡学、心理学、社会福祉の分野の対象とみなされてきた障害者アートの研究において、障害学の視点から、知的障害をもつアーティストと周囲の人々との関係性に焦点を当てて美学および身体観の系譜を検証することを目指す。

知的障害者の芸術表現は、長らく美術教育の外部および社会的周縁に位置づけられ、孤独で純真無垢な存在と結び付けられてきた。クレアムにおける芸術実践を考察の中心に据えて、その「美学」の創出過程に介在している指導者や支援者の役割を指摘し、障害者の芸術表現における美学と身体観の系譜を

解明していく点は、障害学において英米を中心として論じられてきた障害者アートの潮流と、美術史などの芸術分野において論じられてきた「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」の潮流を相対化し、関連づけていく新たな基軸となるものである。

### 3. 研究の方法

(1)1970年代以降の「アール・ブリュット」「アウトサイダー・アート」および「ディズアビリティ・アート」の潮流に関する先行研究を整理し、とりわけ知的障害者による芸術表現に関して、どのような「美学」や「身体観」がみられるのかについて検討を行った。

(2)クレアムにおける実地調査(2015年9月)を行った。クレアムの取組みに関する資料を網羅的に収集するとともに、知的障害のあるアーティストとアニマトゥールと呼ばれる芸術実践の指導者との関係性に焦点を当て、聞き取り調査および参与観察を重点的に行った。

(3)上記の調査と並行して、クレアムの美術館(MAD)において、資料収集および聞き取り調査を実施した。クレアムは、1979年の設立当初において、美術界の潮流である「アール・ブリュット」や「アウトサイダー・アート」とは異なる芸術を提唱することにより、ヨーロッパを中心とした独自のネットワークを築いてきた。クレアムの人々がどのような芸術表現形式を展開してきたのか、そして「アール・ブリュット」や「アウトサイダー・アート」との関連性について調査を行うことを主眼とした。

(4)上記の調査・資料および先行研究の検討をもとに、クレアムにおける絵画、音楽、演劇、ダンスなど複数のプロジェクトの中から表現形式を析出し、知的障害者の芸術表現における「美学」の成立過程と身体観を分析した。その際、知的障害のあるアーティストと、アニマトゥールとの関係性に焦点を当て、アニマトゥールは芸術表現の「美」をどこに見出しているのか、そしてどのようなかたちで介入や指導を行っているのか、それは従来の知的障害者の芸術表現への意味づけとどのように異なっているのかという観点から分析を試みた。

(5)研究成果について研究発表を行い、当該分野の研究者や障害者アートの実践関係者と、研究内容の妥当性について意見交換を行い、得られた知見の検証と研究成果の共有を図った。

### 4. 研究成果

本研究の主な成果は以下の2点である。

(1)「アール・ディフェランシエ(art

différencié)」と呼ばれた芸術の潮流およびその特徴の実態を明らかにした。

クレアムは、画家のリュック・ブーランジェ(Luc Boulangé)により1979年に設立された。ブーランジェが提唱した「アール・ディフェランシエ」は、「知的障害のあるアーティスト」と「アトリエ」という2つの定義に基づくものであった。クレアムは、複数の知的障害のあるアーティストたちが同時に創作活動に取り組んでおり、アニマトゥールと呼ばれるアトリエの担当者から多少とも「指導」を受けている。これは、社会や美術教育などから隔てられて創作活動を行うアウトサイダー・アーティストとは異なる点であるとブーランジェは強く主張し、アトリエを重視する創作活動を展開していく。それは、「1970年代以降のヨーロッパにおけるアトリエのひとつの典型」となっていく。

ブーランジェは、精神障害のある人の芸術は、セラピーを目的とした治療可能な領域にもなりうるのに対して、知的障害のある人の芸術はそうではないこと、そして、「知的障害のある人の芸術には固有の何かがあり、芸術はその固有の何かを出現させることを可能にする」と考えていた。また、それが一部の「本物のアーティスト」によって、卓越したかたちで表現されるものだとも考えていた。このようなブーランジェの考え方は、芸術実践の現場での経験や、画家としての経歴に基づくものであったようだが、批評家たちから定義が曖昧で単純すぎるとの批判を受け、また福祉現場からは「障害者を選別することをどのように正当化するのか」という疑問が投げかけられたという。クレアムの活動がリエージュやブリュッセルをはじめベルギーの国内外で知られるようになると、デイサービスの中でつくられた知的障害者の造形物であれば「アール・ディフェランシエ」という張り紙がなされるといった状況も生じた。結果として、クレアムの一部門である美術館のMADは、アール・ディフェランシエという用語の使用をやめるに至る。この背景には、いくつもの要因が重なったと考えられるが、アール・ブリュットおよびアウトサイダー・アートの言葉が広く社会に浸透するにつれて、それらの用語を用いた方が、人々からの理解が得やすいと判断されたということも挙げることができる。

現在、クレアムでは、世界中のアール・ブリュット/アウトサイダー・アートのコレクションを行っており、クレアムの作品も含めて、「現代のアール・ブリュット」という用語が提案されている。これは美術史におけるアール・ブリュット/アウトサイダー・アートの潮流を位置づけなおしていく試みであると同時に、アール・ブリュット/アウトサイダー・アートの作品に対する評価が、美術市場との関連性のなかで変化したことにも裏付けられている。クレアムの活動の中心はあくまでも作品評価ではなく、アトリエにお

ける創作活動のプロセスに置かれており、クレアムにおける「美学」もまた、日々のアトリエにおいて見出されると同時に、生成されていると考えられる。

なお、アール・ディフェランシエの潮流に関する研究成果については、口頭発表を行い、障害者アートを実践する関係者との意見交換を行った(2015年11月)。

(2) 知的障害のあるアーティストたちの創作活動に、アニメーターたちはどのように関わっているのかを考察し、クレアムにおける美学と身体観の系譜を「即興的身体」に追究した。

クレアムのアトリエには、アニメーターによる絵画、音楽、ダンス、演劇、サーカスなどの他に、エドゥカトゥール(生活支援者)による料理、工作、言語療法などがある。アーティストたちは、週ごとに、それぞれ参加するアトリエのスケジュールを決めている。こうしたアトリエを中心とした活動のもと、アニメーターたちは、アーティストたちの表現に「命を吹き込む」役割を担っている。アーティストたちは、それぞれの表現形式を見出し、結果としてその人自身の作品としかいいようのない作品を生み出し、それを鑑賞者の前に送り届けていく。そのプロセスにおいてアニメーターは、プーランジェの言葉を借りていえば「共犯的な」存在である。もっといえば、アニメーターが介在することによって立ち現れてくる表現なのであり、作品となっているともいえる。知的障害のあるアーティスト各々の感性や感覚に基づいた表現を見出すには、アニメーターとアトリエという場が不可欠である。

絵画をはじめとするクレアムのアトリエが、アニメーターの言葉によれば「日々進化」し「毎日、建て直しのプロセス」にあるとすれば、それを可能としている鍵は、クレアムが重んじてきた「即興」にある。クレアムのアニメーターには「即興がもっとも彼らにあったやり方」であると捉えている者もいる。ここには、「その場、その時」に即興によって生み出される表現にこそ、芸術的な力が発揮されているとする見方を認めることができる。視点を変えれば、即興に基づく表現を、鑑賞者にも開かれた「芸術」へと転換させる鍵を握っているのが、アニメーターである。

そこで考察にあたり、アトリエで実践されていることが一般公開され、観客たちへと開かれる機会のひとつ、「即興の水曜日」の試みに着目して分析を行った。2001年にはじまった即興の水曜日は、月に1回、水曜日の夜に開催されるイベントであり、一般の人々にも公開されてきた。即興の水曜日の下地になっているのは、演劇とダンスのアトリエであるが、音楽、サーカス、絵画のアトリエとの組み合わせでなされることもある。即興表現による1時間程度の公演である。

本研究では、クレアムの即興の水曜日を分析するにあたり、主に人類学者の松嶋健が論じている、イタリアの精神保健活動における演劇実験室のプロジェクトを参照した(松嶋健『プシコ・ナウティカ イタリア精神医療の人類学』京都:世界思想社、2014年)。松嶋の論考をもとに、クレアムの即興を読み解いてみると、即興とは「贈りもの」であり、そのような感覚に身体が委ねられて表現が生み出されているといえるだろう。松嶋を援用していえば、即興は、他者との「あいだ」から、他者との「出会い」から触発されて立ち現れる「贈りもの」である。

こうした即興表現が成り立つためには、行為の起点に意識的にコントロールする主体を置かないことが前提となる。即興は、触発されつつ表現する身体であり、無意識のなかに沈んだ身体が、ふとした瞬間に習慣から逸脱するときのように意識に現れてくる。それは、受動でも能動でもないゆえに自ずと生起するというかたちをとる。松嶋は、能動態でも受動態でもなくその中間にある身体のありようを「中動態」というギリシア語に由来する用語で説明した。クレアムのアーティストたちにとっての即興もまた、能動と受動のあいだの領域において、その双方の側からの「挟み撃ち」(松嶋、pp.314-315)において生起すると考えられる。本研究では、そうした「挟み撃ち」を「即興的身体」と呼び、クレアムの実践において目指されているのが、「能動」と「受動」とのあいだに「即興的身体」が生起する場を用意し、待ち望み、その実現を叶えることであると捉えた。

即興的身体を実現することは、知的障害をめぐる眼差し、身体観の変容をもたらすことでもある。即興的身体は、何かを表現するのではなく、身体が己自身を表現するということであり、自分自身とのあいだに距離をさしはさむことである。それは「見られるものとしてのわたし」を生起させることにほかならず、そのとき他の身体が必要不可欠な身体として要請される。即興的身体とは、他の身体の介在しないし外部からの作用によって能動と受動とのあいだに開かれた身体であり、生成的身体であり、表現にかたちを与えると同時にみずからをかたちづくる身体のありようである。

クレアムの実践において、創造性とはこの即興的身体を示しており、即興的身体を可能にする場としてのアトリエがあり、アニメーターの存在がある。プーランジェは著書において、「アニメーターを務めることができないアーティスト」や「制作できないアニメーター」が、そのことを隠すために『非介入』という空っぽの概念の影に立てこもるのではなく、「アーティスト兼アニメーターの両方でなければならない」と述べていたが、クレアムのアニメーターは、アーティストたちの即興的身体の現れる瞬間を見逃さず、それを芸術として提示する役割を

担っていると考えられる。

本研究の成果は、筑波大学人文社会科学研究所現代語・現代文化専攻において開催されたシンポジウムにおいて口頭発表した(2016年3月)。

障害学は、障害のある身体へのまなざしがいかに障害のある身体を「無力化」し、その経験世界を見過ごしてきたのかを問いかけてきた。ブーランジェが知的障害のあるアーティストにも、障害のないアーティストと同じような芸術への参加の権利を求めてクレアムを創設したのは、そうした社会に対する働きかけとみることもできる。知的障害のある身体が、日常生活において感じるさまざまな困難や生きづらさと、芸術表現のありようは、現代社会が身体に課している「自律した主体」のあり方やその支援をめぐる議論にも示唆を与えてくれるものである。

以上の2点の成果について、現在、研究論文としてまとめており、速やかに発表する予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔その他〕

口頭発表(計2件)

田中みわ子、「ベルギーの芸術団体クレアムにおける『即興的身体』」、シンポジウム「触発する/される身体 障害学、人類学、美学の観点から」、2016年3月26日、筑波大学。

田中みわ子、「アール・ディファレンシエってどういうこと?」、リベラルアーツ研究会、2015年11月3日、NPO法人自然生クラブ(茨城県つくば市)。

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 みわ子(TANAKA, Miwako)

東日本国際大学・福祉環境学部・准教授

研究者番号: 10581093